

ドイツの自然で育まれる心

野原咲子

(幼稚園教諭)

ドイツは、フリードリヒ・フレーベルによつて、現在の幼児教育の礎となるキンダーガルテンが誕生した地であり、近年は森の幼稚園など、ドイツの豊かな自然環境を生かした保育実践が多く見受けられます。実際にドイツで生活をしていると、都心であっても緑あふれた公園が多く、そこでは野ウサギやリスに出会ったり、おいしそうに実った果物を頬張ったりと、豊かな自然があるからこそその発見や楽しさが日常にあふれています。

私は現在、ドイツのとある街の日本人幼稚園で年中児クラスの担任をしています。広い園庭には、ベリー類や洋梨、ミラベラの果樹

など、自然がいっぱいです。池やビオトープでは、カエルやイモリ、ヤゴ、ザリガニなどの生き物と触れあうことができます。また、子どもたちが畑で野菜を育てたり、メダカやインコのお世話をしたり、ドイツの恵まれた自然を生かし、本物に触れる体験を大切にしている園です。

そんな園でのびのびと生活する子どもたちが、ある生き物とのかかわりを通して、身近な生き物へのまなざしやかかわり方が変容していったエピソードをお伝えします。

カタツムリとの生活

昨年のドイツの冬は異常気象といわれるほど厳しい寒さが長引き、6月頃まで安定しない天候が続く毎日でした。雨の日には私たちの幼稚園にもたくさんのかたつむりが遊びに来ます。私のクラスは生き物が好きな子が多く、朝の支度を終えると、カタツムリがたくさん見つかる畑やビオトープのある場所へと一目散に走っていきます。

そんな日々を過ごしていたある日、カタツムリを愛してやまないA児が「カタツムリを飼ってみたい！」と言ってきたのです。身近な生き物への関心やかかわりが深まる機会になれば、とクラスで飼ってみることにしました。早速カタツムリのおうちの準備からスタートです。その際に「なるべくカタツムリがいつも生活している所と同じおうちを用意してあげたいね」と子どもたちに伝えると、彼

らは大きな虫かごの中に、石や落ち葉を並べ、それらを水で湿らせ、カタツムリを見つけきた場所と同じようなおうちを作りました。しかしまだ年中になって2か月の5月。子どもたちそれぞれのペースで幼稚園での生活の中に楽しさを見つけ出していた時期でしたので、心が動いた人がお世話にかかわるといった緩やかなスタートでした。

カタツムリと子どもたちとのかかわりはどんどん広がっていきました。ある日はB児が粘土を出してきて、じっくり観察しながらカタツムリを作りました。それを見て、「ぼくも！ わたしも！」と次々にカタツムリの完成です。毎日手にとって遊んでいるだけあって、その再現度の高さに、子どもたちの鋭くも豊かな眼に感動させられたことを鮮明に覚えていきます。

また、子どもたちは、カタツムリの絵本を読んで、食べ物によってウンチの色が変わっ

てくることを知ると餌を変えてみたり、殻の大きさによって何歳かわかることを知ると、カタツムリを連れてきては、何歳か推定ごっこを始めたりました。

生まれたモヤモヤ

「カタツムリの友達がいよいよ」と、クラスで飼っている3匹とは別に、多いときには20匹ものカタツムリを連れてくる日もしばしば。目を輝かせて生き物とかかわり、遊びを深めていく姿を喜ばしく思うのと同時に、コンクリートや砂ばかりの人間の世界に生き物を連れてくることに對して、私の心の中で何かモヤとした感情が生まれるようになりました。カタツムリは環境をかき回されることで生きにくくなってしまっているのではないか。また、カタツムリとつながりあって生きている植物や生き物に何か影響が及んでいるのではないかと考えるようになったのです。言葉

に書き起こすと少し大きな印象を受けますが、ぼんやりとそのモヤとしたものが私の心の中でずっと引つかかっていたのです。

そこで私は子どもたちに、カタツムリにもおうちがあること、突然知らない所に連れて行かれると、カタツムリも驚くだろうから、みんながカタツムリのおうちに遊びに行くのはどうか、と提案してみました。しかし子どもたちは「うん！ わかった」と口にしつつも、やはり翌日にはまた、人間の世界にカタツムリを連れてきては楽しんでます。なかなかうまく伝わらないな、と思っていたある日のこと、大きなきっかけとなる出来事が起きたのです。

命あるものとしてのモヤ

クラスで飼っているカタツムリ以外は、元いた場所に返すように普段から声をかけていたのですが、あまりの数に返しきれっていない

こともありました。そんなある日、園庭に残っていたカタツムリが、年長さんが大事に育てていたヒマワリの芽を全部食べてしまったのです。緑の多い普段のすみかから、コンクリートと砂ばかりの場所へ連れてこられて、きつとおいしいものを探し求めたのでしょうか。

翌朝子どもたちに、カタツムリが年長さんのヒマワリの芽をすべて食べてしまったこと、みんなが連れてきたカタツムリが食べたかどうかは誰にもわからないけれど、カタツムリも生きていくために食べ物がある場所を必要としているのかもしれない、と話をしてみました。すると、子どもたちはこれまでにない真剣なまなざしで私の話を受けとめ、彼らなりに何かを感じているようでした。

それからというもの、子どもたちは「○○（生き物）のおうちに遊びに行つてきます！」と元氣よく出かけていきます。この出来事で、身近な生き物にも生活や命の営みがあること

を知った子どもたち。生き物を見る眼に「命あるものとしてのまなざし」が加わり、さらに、大切にしたいと思う気持ちが芽生えてきたような気がします。

何かを大切にしたいと思う気持ちは、誰かに教えられるものではなく、子ども自身が自分の心を働かせることで芽生え、育まれていくものだと感じています。

自然や身近な生き物とのかかわりは、子どもたちにたくさんの気付きや発見、感動を与えてくれます。これからも、自然の小さな変化に気づいたり、驚いたり、感動したりする心を大切にしていく中で、生き物だけでなく、他者とのかわりも豊かになっていくことを願いながら、子どもたちの生活に寄り添っていききたいと思います。

